みの MINO EDO
東京⇄笠原情報誌 MAIL版

発行：多治見市美濃焼タイル振興協議会
TEL 0572-43-2141
発信：多治見市・笠原町東京情報局
tilesea.ms@gmail.com

＊協議会のウェブサイトでも公開しています。

NO 218
2020.3.28

ようこそ新時代の銭湯空間へ

～昔も今もタイルが主役！

老朽化や後継者不足により、年々姿を消していく銭湯。タイル好きとしても寂しい限りだが、その一方、既存の銭湯を改修し、または新築により「デザイナーズ銭湯」が生まれている。手がけるのは建築士・今井健太郎さん。2月に上梓した『銭湯空間』には「銭湯＝昭和レトロ」のイメージを覆すタイル空間が並ぶ。今井さんにタイル使いについて伺った。

銭湯の写真提供：（株）今井健太郎建築設計事務所

今井健太郎さん
（株）今井健太郎建築設計事務所代表取締役。一級建築士。20代後半より風呂なしアパートに住んだのを機に銭湯ファンとなり、160軒以上の銭湯の調査を実施。現在、銭湯／温浴施設を中心としたリサーチ、設計、イベントなどを手がける。

松の湯（東京都八王子市）
木造の構造体をそのままにリノベーション。八王子の街を象徴する「れんが」「路面電車」「黒塀」のイメージを取り入れた。モザイクタイル絵は松林と富士山の風景。写真右は、施主に改修イメージを伝えるための模型。

今井さんの手がけた銭湯は東京で16件。富士山をモチーフとしたモザイクタイル絵に、タイルで覆われた浴槽――。従来の銭湯のイメージを踏襲しつつ、新しいセンスに満ちた空間となっている。

マンションや店舗、住宅と、タイルが使われる場所は様々だが、銭湯ほど多種類のタイルを、空間のほぼすべてに使うところは他にない。これだけのタイルを使うのには、かなりの苦労があるのでは――？

「そりゃあ、めちゃめちゃ大変ですよ！　考えに考えぬきます」と間髪いれず返ってきた。

その大変さを聞かせていただいた。

銭湯の隠れた見所！？

まず銭湯が他の建築と違うのは、様々な立体物があること。それゆえ、壁（平面）だけではなく、エッジやコーナーがたくさんある。その部分をどう納めるかに、一苦労するという。

「役物(＊1)まで揃っているタイルは意外と少ないですよね。また、小端(＊2)まで釉薬がのっているか。こちらの面はのっているけど、反対側はのっていないとか。そうしたことを考慮して、タイルの張り方を考えます。フルボディ(＊3)だとカットしても断面が同じなので、そのまま使えて便利なのですが」

カタログを見て色や形がいいと思ってサンプルを取り寄せても上記の理由で使えないことも多々ある。すると、また別のタイルを探し、サンプルを取り寄せる。「ジャストフィットするタイルが意外と少ないわけです」。

「また、必ずタイルをカットする部分が出てきます。しか

＊1 役物（やくもの）：端部やコーナー部など納まりにくい部分に使う特殊な形のタイル。
＊2 小端（こば）：タイルの側面の、面積の小さい端面のこと。
＊3 フルボディ：釉薬をかけず、素地がそのまま表面となっている無釉タイル。
タイル自体が一層のみで形成されるため、フルボディと呼ばれる。
＊4 テーパー：エッジ部分を丸く削ったり、斜めにカットしたりすること。

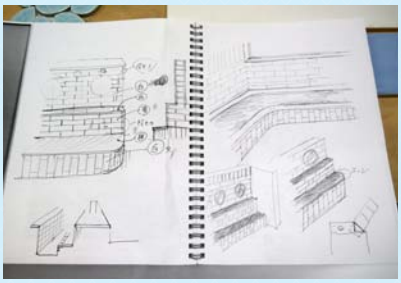
フルボディのタイル。

小端に特注で釉薬をかけたタイル。

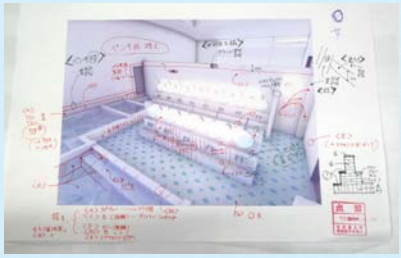
現在進行中の再生物件

デスクには、使用を検討しているタイルが並べられている。

ラフスケッチには、役物、白たて、などのタイルの使い方も書かれている。



床のデザインと使用するタイルのサンプル。「組合せは、デザインシュミレータを使います。いろんなパターンをつくって、一番いいものを採用します」



CGを使って制作した立体図面。寸法のほか、「青ボーダー」などタイルについても細かくメモされている。

銭湯の新築は設計に1年、工事に1年。改修は設計に半年、工事は3カ月程度を要する。

も直線ではなくアール（曲線）のこともある。人が触れやすい端部は、タイル屋さんにテーパー(*4)をかけてもらうなど特注します」

などなど、苦労の数々が打ち明けられた。建築やタイルの関係者以外には、聞き慣れない用語も登場し、何のことかピンとこない方もいるかもしれない。今井さんもそれは承知で、

「マニアックすぎるから、ふだんは語っていないんですが……。こういう大変さはなかなか理解してもらえないので、思わず力が入ってしまいました」と笑う。話してくださったのはタイル情報誌だからこそ。

「この辺をがんばっているというか、ベストなところを目指している結果、他にはない空間ができ、いいなあと思ってもらえるのではないかと信じています」

ぜひ銭湯に出向き、その細部のタイル使いを目で確かめてほしい。

モザイクタイル絵は45万回のクリックで

次は正真正銘の見所であろう、見事なモザイクタイル絵の制作過程について。今井さんが東京で手がけた銭湯のうち、7軒がモザイクタイル絵を施している。

「まず10分の1のサイズで原画をつくります」

大蔵湯（東京都町田市）のタイル絵の原画を見せていただく。日本の名画を元にすることが多く、こちらは横山大観の作品「朝陽霊峯」をモチーフとした。タイルの色数はそれほど多くないこともあり、色相をかなり変え、12色のタイルで構成している。

原画は、ソフトを使って下絵をマス目に変換してつくるのかと思いきや……「一個一個クリックします」。反射的に「何回クリックが必要ですか」と聞くと、「使用しているタイルが45万枚なので、45万回ですか。失敗や、やり直しがあるので、トータルで100万回くらいでしょうか」。途方もない回数だ。

物件ごとにタイルのサンプル帳を作成

施主にこれで確認してから施工する。写真は「栄湯」のもの（4ページに紹介）。

この原画を元に、工場でタイル職人さんが一枚一枚、モザイクタイルに置き換えていく。言うまでもないが45万枚のタイルを。そうした制作の過程を知ると、モザイクタイルの富士山もいっそう神々しく見えてくる。

銭湯専門の職人さん

今井さんの設計図を元にし、銭湯を実際につくりあげていくのは、施工業者や職人だが、そこには高い技術が求められる。

通常、工事はまず工務店に依頼し、その工務店から、ガラスやサッシなど、個別の施工業者に依頼する。そこでタイルだけは、今井さんが業者を指定するという。

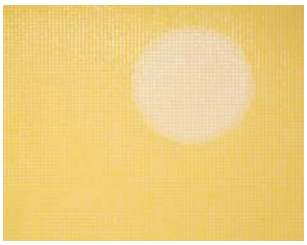
「銭湯の浴槽をつくるときは、まず鉄筋を組んでコンクリートをうち、ベースの形をつくります。そこにモルタルで中間仕上げをするのですが、そのときに水勾配をつくります。水勾配はすごく大事です。その職人さんにはその部分がまったく心配なくお任せできるんです。そして仕上げにタイルを張る。左官もタイルも、コンクリートもできる、ということがポイント。これを三職種別々の業者さんに頼むと工

タイルのサンプルが種類ごとに箱に入れられている。

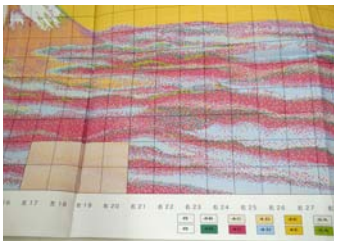
壮大なモザイクタイル絵！

大蔵湯（東京都町田市）
コンセプトは「外湯気分な銭湯」。古きよき銭湯を特徴づけるモザイクタイル絵や、格天井、木製ロッカー等を取り入れた。

メインとなる浴室奥側の壁には富士山が描かれ、対面側の壁には富士山を照らす朝日が描かれている。



モザイクタイル絵の元となった横山大観作「朝陽霊峯」。



原画を元に、職人さんがタイルに置き換えていく。原画は、色の違いが分かりやすいように、別の色に変えている。

初期は指定タイルごとに原画を分けていたが現在は一枚にまとめている。「原画を作品にして発表することを考えています」

モザイクタイル絵に使用するタイルのサンプル。

程にロスが出てしまいます。一業者さんでやってもらえると、工期はやりくりできるし、打ち合わせの手間も、おそらく施工費もだいぶ省けます」

「関東一円の銭湯をわりと専門でやっている」というから頼もしい。タイル職人が減りつつあるが、素人考えながら銭湯の仕事は大変な分、やりがいがありそうだ。

「銭湯の仕事は手間がかかるわりに儲けは少ないと思いますが……。ただ、いまの若い人たちは、お金がすべてではないという価値観をもっていたり、ニッチな世界観に関心が高かったりします。興味をもつ人もいるかもしれませんね」

聞けばモザイクタイル絵が以前よりつくられる機会が減るにつれ、制作する会社も減っている一方、タイル絵の原画制作からタイルの置き換えまで行なう若い女性のデザイナー兼職人さんもいるという。タイル職人もこれから増えていくかもしれない。

ガウディから銭湯へ

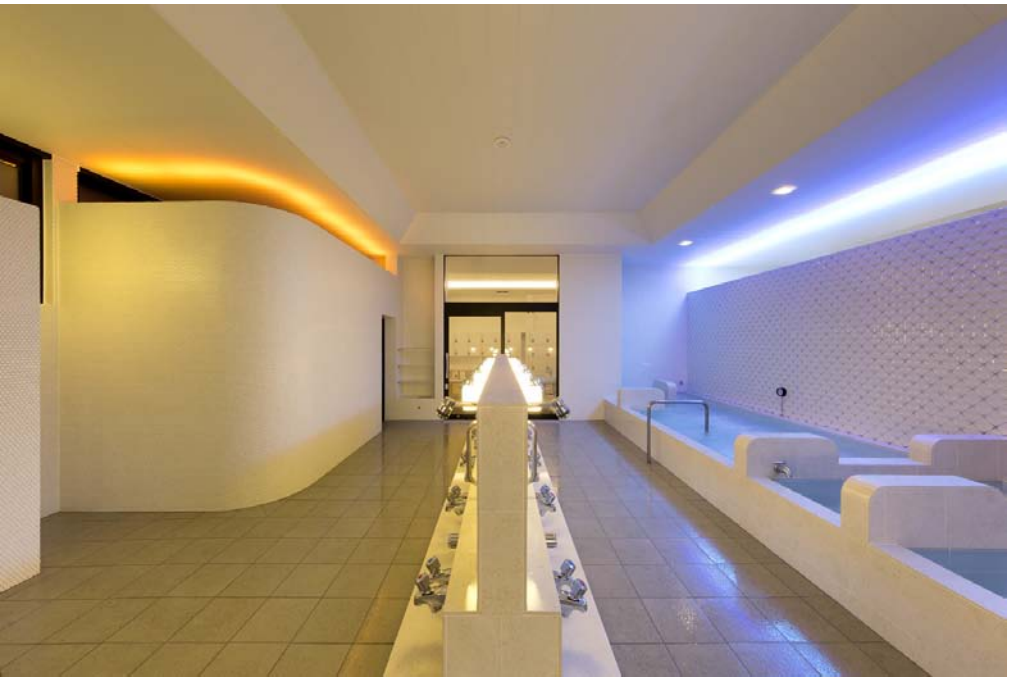
最後に、タイルが使われている建築で好きなものを聞くと、「ガウディですね」ときっぱり。そもそも今井さんが建築を志したのは、学生時代の海外旅行でアントニ・ガウディの建築に出合ったのがきっかけだ。

「ガウディの作品では、パブリックに開かれたアート空間というあり方にすごく共感したんです。かしこまって美術館で鑑賞するのではなく、日常の、すぐに触れられるところにあって、しかもその空間自体に入って楽しめるという。銭湯も日常にあるアート空間という一面があります。はじめてガウディをみて感じたことが、いま銭湯という形で、自分なりに展開できていることが嬉しいですね」

今後はタイルを再利用する活動を考えているという。

「グエルパークではタイルを割って再利用しているのがすごくいいなと思いました。事務所にはサンプルがたくさんありますし、タイルメーカーでも使われずに廃棄されてしまうタイルが多くあると思います。そういったタイルを再利用する取り組みをしたいですね。自分の仕事とからめていけたら面白いなと。先の課題ですが……」

活動は銭湯に留まらず、さらに展開していきそうだ。



注目の銭湯タイルたち

今井さんの著書
『銭湯空間』からご紹介。

『銭湯空間』(KADOKAWA)
今井さんが設計した東京の銭湯を写真とともに紹介。「湯空間デザイン史」など、銭湯の歴史も学べる。1章に綴られた銭湯との出合いのエピソードも楽しい。

栄湯(東京都新宿区)
近所の哲学堂公園にちなみ、自分の気持ちを投影する背景、あるいは内省し、心を解放するキャンバスとして壁に様々な形状のオフホワイトのタイルを使用。

タイルに包まれる

イーストランド(東京都江戸川区)
広めの水風呂。

改良湯(東京都渋谷区)
瞑想的空間をイメージしたモザイクタイルの浴槽。

レトロタイルを生かす

はすぬま温泉(東京都大田区)
昭和初期の貴重な絵付けタイルを再利用。

可愛いデザイン

千代の湯(東京都目黒区)
レトロ感もあるデザインパターン。

イーストランド
(東京都江戸川区)
丸柱にオリジナルのモザイクタイル絵を施工。「タイル絵のサイズにぴったり合うように、柱を少しモルタルで太らせて調節しました」。隠れた苦労がここにも。

●タイルへの要望はありますか?
「……なんでしょうね。十分すぎるほどいろいろな種類が出回っていると思います。派手なタイルではなくて、ちょっと個性があるくらいが好きなので。しいて言えば釉薬の質感や、ボディの質感に深みがあるタイルがほしいです。なおかつカットした断面も同じ色の、フルボディのタイルが増えると悩みが少なくて済みます(笑)」

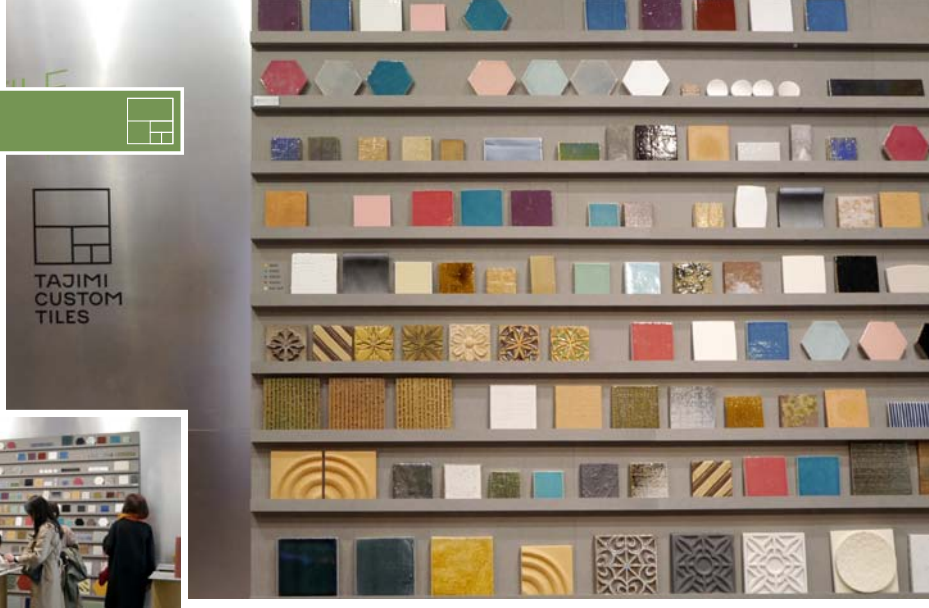
番外

K邸
住宅に設置したモザイクタイル絵。蓮の絵が描かれているのは仏間ゆえ。

TILE KIOSK in スパイラル

～多治見のタイルが集合～

2月13日（金）～23日（日）、スパイラル（東京都港区南青山）の1階ギャラリースペースにて、多治見のタイルを集めた「TILE KIOSK」が開催された。展示したタイルは一枚から購入可ともあって、手にとってじっくり選ぶ人も多く見られた。



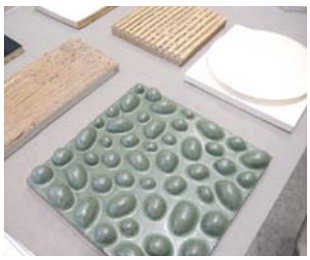
スパイラルは多目的ホールや生活雑貨店、ギャラリーを擁する複合施設。TILE KIOSKは、1階の入り口付近のスペースに11日間の期間限定でオープンした。

この企画は多治見市のタイルメーカー・エクシィズが立ち上げたブランド「TAJIMI CUSTOM TILES」にちなんだもの。同ブランドでは、多治見の複数のメーカーと連携し、オリジナルのタイルを受注製作。会場にはそれらのメーカーの試作品やデッドストックを含む、色や形も多様なタイルが並んだ。

厚みがあり、色むらを残したタイルは、押出成形や鋳込みなどの製法で作られたもので、焼き物らしい存在感が魅力。一枚から購入可とあって、手触りを確かめながらじっくり選び、複数枚を購入していく人も見られた。

「TAJIMI CUSTOM TILES」は、6月に開催するミラノサローネに出展予定で、このTILE KIOSKはそのお披露目的な意味合いをもたせた。タイルとともに展示された2つの立体作品は、デザイナーのマックス・ラムさん（イギリス）、イ・カンホさん（韓国）が多治見に滞在して制作したもの。ミラノでも二人のインスタレーションを発表する。

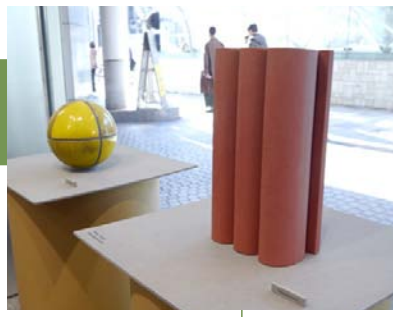
様々な可能性を秘めた多治見のタイルが世界に知られる機会となりそうだ。



販売状況は好調で、タイルを追加したほど。デザイナーが作品の素材に、料理を盛りつけるお皿にと、用途も多様だ。

＊ミラノサローネ
イタリアのミラノで毎年4月に開催される世界最大規模の家具見本市「ミラノサローネ国際家具見本市」の通称。今年は6月に開催予定。

多治見×デザイナーのコラボレーション



奥の作品はマックス・ラムさんによる「ワーキング・タイル」、手前はイ・カンホさんによる「タイド」。

二人の作品の一部は会場で限定販売された。青い立体物はイ・カンホさん、2枚の反った形のタイルはマックス・ラムさんの作品。

テーブルウェア・フェスティバル2020 開催

～暮らしを彩る器展～

日本の名窯から海外ブランドまでが一堂に会する国内最大級の「器の祭典」。28回目となる今年は、2月2日～10日に開催。会場となった東京ドーム（東京都文京区）は多くの人で賑わった。今年は多治見のタイルも参加、その様子をメインに紹介する。

「わたしの逸品 まいにちの逸品～多治見」のブース（写真上）。花瓶や器の下にはタイルパネルが敷かれている（写真右）。

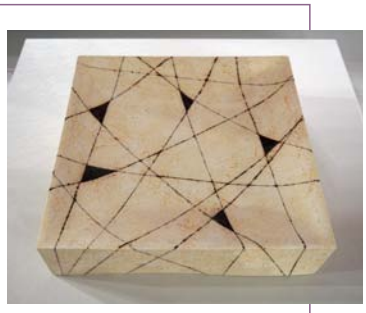
多治見のタイルと器がコラボレーション

毎年出展している「わたしの逸品 まいにちの逸品～多治見」では、美濃焼の器をテーマごとに展示。今年は多治見のタイルパネルが彩りを添えた。

個性あふれる作品たちにも注目

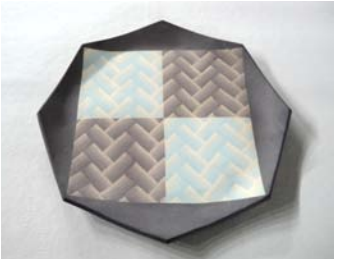
イベントの見所の一つがテーブルウェア大賞。オリジナルの器やテーブルウェアのコーディネートを競うもので、多数の応募作品の中から1次審査を通過した207作品が会場に展示された。

「彩泥彫文皿『せせらぎ』」藤澤徳雄

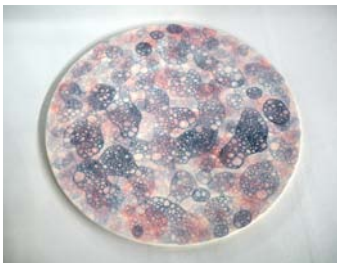


「Dice」大塚くるみ

「琳」早川邦江



「練込綾杉紋様八方皿」木内洋介



「bubble plate」田村栄一郎